

## 思い出の記

### ―北朝鮮からの引揚げ―

兵庫県 岸本 卓

#### 一 生い立ち

私は、昭和五（一九三〇）年十一月十一日に、当時日本統治下にあった北朝鮮の清津で生まれた。そこは日本海沿岸の北部に位置し、戸籍上の表示によると、咸鏡北道清津府朝日町十六番地となっている。旧姓は古橋で「卓」と名付けられたが、これはそのころの清津府尹（フイ）、今で言うところの市長職だが、その府尹が古橋卓四郎という人であったということから、それにちなんで一字を取って卓と名付けられたのだと聞かされた。

北朝鮮の地で生を受けたということは、つまり両親が既にかの地に渡っていたからである。そのいわれは、父母双方にとって大伯父に当たる人が明治の末期に渡鮮して生活の基盤を築いていたの

で、それを頼って行ったからである。

従って、小生出生時の家族構成とそれぞれの年令は、大伯父四十六歳、その妻四十三歳、父三十三歳、母二十四歳、それに長男、次兄という七人家族であった。

家族同様の人が、いま一人起居を共にしていた。それは朝鮮人のお手伝いさんで、家族の多い家では大抵は雇っていた。そのころの内出人（日本人をそう呼んでいた）と朝鮮人との間の差別は歴然としており、賃金もごく安いものであったに違いない。名前も創氏改名の前にも関わらず、そのお手伝いさんには日本名をつけて呼んでいた。

大伯父は清津港荷役会社の現場監督、父は船員で常に留守仕勝ちであった。

私が生まれた年は、世界恐慌（昭和恐慌とも言われていた）の真ただ中で、翌昭和六年には満州事変が、七歳になった年の昭和十二年には支那事変が、そして九歳の昭和十四年に第二次世界大戦が起き、十一歳になった昭和十六年に太平洋戦

争と、私の成長するにつれて戦争も拡大していく、そんな時代であった。

## 二 故郷、清津は

清津は昭和十二年、人口約五万六千人という統計（同年府勢一斑）がある。終戦当時は日本製鉄を初めとする多くの工場、事業場の開設と徴用工の動員などで、約十万人以上に膨れ上がっていたと思う。街は旧市街と新市街に分かれています、前者は明治、大正時代から開けた街、後者は戦争と共に開けた街であった。住宅地は内地人地区と朝鮮人地区にはっきり分かれていた。内地人住宅は中心部に集中し、朝鮮人住宅は辺りな地区にあった。旧市街には住宅のほか、神社、お寺、行政機関、商店街、日本人学校などがあり、新市街は工業地帯とそれに伴う住宅、学校などで、日鉄、三菱製鋼、日紡など大企業が工場を構え、鋼を原料とする大規模な油脂工場もあった。私の家は、大伯父が清津で居を構えた時期が古かったので、旧市街の中にあつたが、その中でも古い方であった。

## 三 私の学んだ小学校・工業高校

小学校は清津公立尋常高等小学校というのが正式名称であったが、内地人と朝鮮人とに分かれていた。児童数が千人を超えるような大きな学校で、設備も充実していた。当時の時代背景をよく表していると思うから、同校校歌の第一節を紹介する。

「窮きつみなき栄え千代田の

御稜みらい威を仰ぎ

学ぶ恵みに輝よう我れ等

身体鍛えて知徳を磨き

皇御国すめらみくにの力とならん

守りとならん」

私はこの小学校を昭和十八年に卒業した。

清津には中学校、高等女学校のほか、各種の実業中等学校があつた。太平洋戦争も三年目に入っていて、軍需物資の生産増強が叫ばれる中で、工業教育は重視されていたが、この工業学校は昭和十六年四月に開校された。私は同十八年四月に三回生として入学した。特筆すべきことは工業学校

は内地人、朝鮮人共学であったことで、定員の半数ずつをそれぞれ入学させたが、人口は朝鮮人が圧倒的に多いので、必然的に難関を突破してくる形となり、優秀な生徒が多かった。戦時の人材不足は教師の面にも見られ、全体に不足気味であった。若い先生方はほとんど朝鮮人であったが、皆日本内地の大学や高専で勉強してこられた方々であった。戦時下における中等学校教育の重点であった軍事教練は厳しいもので、一言で表現すれば「尽忠報国」「命令の絶対服従」ということになるか？ 随分絞られた記憶がある。

#### 四 学徒動員に

定かな記憶ではないが、教室で時間割りに従っての授業を受けたのは、入学した昭和十八年の一年のときだけではなかったろうか。その年の六月二十五日に、「学徒戦時動員体制確立要綱」が発効された。いわゆる「学徒動員」の始まりである。私が一番印象の強い動員は、日本製鉄における石炭石貨車積み作業で、相当にきついものであった。

それでも授業から解放され、大勢で騒ぎながら作業するのが面白く、それがどんな事態を表しているのかも知らず、至極安閑としたものだった。

昭和二十年三月からは、親元を離れて寮生活をしながらの動員となった。その動員先は、北朝鮮東北端の「阿吾地」という所に所在する、朝鮮人造石油株式会社阿吾地工場という航空用燃料メタノールを生産している工場だった。私は分析室に配置されたが、何をやらされていたのか定かな記憶がない。同級生の中には、夜勤があったり、一般工員と同様に油にまみれて機械の運転や管理に当たった者もいた。つらい思い出として今でも記憶に残っていることは、常に空腹であったということ、寮生活の夜間には軍隊における内務班的雰囲気があり、上級生の制裁に怯えなければならなかったということであった。このような寮生活による学徒動員も、突然に幕切れとなった。それはソ連軍の侵攻であった。

#### 五 会寧から清津へ

後日、年表を見ると、ソ連軍の侵攻は次のようである。

八月八日、ソ連、対日宣戦布告

八月九日、ソ連軍、雄基、羅津を空襲

ソ連軍、東北鮮国境地帯から侵攻開

始

さらに、上級生の体験手記によると、九日早朝に阿吾地工場上空にソ連軍偵察機二機飛来、工場の機能停止。工場従業員、動員学徒とも管理部門別に集合を命ぜられて待機、夜間には帰寮となった。当然ながら、厳重な灯火管制下の行動であった。

翌十日早朝に、監督教師の「直ちに母校へ向かい出発する。各人は準備でき次第、再び現在地に集合」との命令があったが、これが避難行の始まりとなる。野宿二晩、三日歩いて会寧に着く。

地図上の直線距離で約五十キロメートル、山間の道を登ったり降りたりして踏破した。会寧地区出身の同級生は、そこでそれぞれの自宅に帰った。

野外炊さんの道具も食糧も持ち歩いた記憶がないが、三日間何を食べたのか思い出せない。

会寧駅からは列車に乗ることができた。夜半少し前にやつと清津駅に到着し、真つ暗な駅前広場で監督教師の「別命あるまで自宅待機。解散！」の号令で家に向かった。これが私の学校生活の終わりとなった。

六 帰宅、再び避難行始まる

学校からは、それぞれの動員学徒の家には帰省が知らされていたとみえて、家では食事を用意して待っていた。久しぶりの我が家でぐっすり眠ることができた。

翌十三日、清津は朝から不安状態にあった。朝、いったん避難命令が出されたがすぐに取り消される、ということが起こる。避難命令が取り消されても、既に大勢の人は南を目指して避難行動を起こしていた。残っていたのは、我が家のように生活基盤のすべてがここにあるような、古くからいる人たちだった。しかし、これらの人たちも十三

日夕刻には追い立てられるようにして避難が始まった。市街地に火災が発生し、上陸してきたソ連軍との間に戦闘が始まったのである。夕闇にこだまする銃砲の音に、情勢待ちをしていた人たちも一斉に浮き足立って避難を始めた。

#### 七 鎮南浦を目指す

我が一家は、まだ清津に未練があったし、加えて日本の敗戦などは予想さえしなかったため、何とか戦火の治まるのを待って再び清津に戻りたいと思っていた。そこで、知人を頼って鎮南浦を一時的避難先としたのである。鎮南浦は黄海沿岸、大同江河口に開けた都市で、大同江をさかのぼれば北朝鮮の首都、平壤市である。

鎮南浦到着八月二十六日、避難行十三日のことである。その間空襲、野宿、果てしない徒歩、貨物列車便乗等々。途中で親子が行きはぐれたが、運良く再会できた。また、同級生や知人も見かけた。それぞれ懸命の避難行だった。そんな最中に気の毒だったのは、軍隊に召集された人たちであ

った。召集兵の中に、偶然かつて教えを受けた先生を見かけた。わずかの間話をしたが、後で聞くところによると、シベリア送りになったとのことであった。

#### 八 避難民生活始まる

「日本が連合国に対して無条件降伏した」ということは、鎮南浦に着いてから知った。九月二日には、三十八度線による南北分断が始まる。

こうして帰国の道は閉ざされ、地元居留民と避難民の抑留難民生活が始まった。ソ連軍が進駐して臨時政府が樹立され、大通りにはアーチが作られて、金日成、スターリンの肖像画と政治スローガンが掲げられた。当初は見られなかったが、そのうちに「打倒李承晩、売国奴金九」などと、三十八度線以南の臨時政府などを誹謗するものが見られるようになった。

そのうちに、「接収」という名による略奪が始まった。日本人は体一つで朝鮮に来たのだから、帰国も体一つで帰れという理屈で、不動産は言うに

及ばず、個人所有物にも及んだ。ソ連兵による略奪もうわさに聞いたが、我が家には手荷物以外何もなかった。

手持ち現金はたちまちなくなり、帰国の目途も立たない時期に日本人会が発足し、ソ連軍や北朝鮮臨時政府への使役の斡旋に乗り出した。これにより、何とか生活することができるようになった。小学生であった弟妹は別として、一家をあげて働いた。私の例を挙げると、塗装工としての使役が一番多かった。昭和電工の社員寮が平壤学院という軍事教育施設に改装されることになり、大勢の職人と素人工が動員された。天井、窓枠、扉などすべて塗り替えられた。このときは食事付き泊まり込みで、久しぶりに白米飯にありついた。

鎮南浦高女の校舎がソ連軍の司令部として接收されていたが、これが火災を起こし大改装工事になった。このときも大勢の日本人が使役として駆り出された。今にして思えば、工事費が随分節約になったと思う。最も、我々も大いに助けられた

ものであった。この仕事の最中、私は腕に怪我をした。公傷だからというわけで、ソ連軍軍医の診察を受けた。女医だったが、私が言う「痛い」という日本語を知っていた。幸い軽傷で済んだ。

#### 九 困窮生活続く

使役での大伯父の仕事は雑役が主であった。日本統治が崩壊し新体制が発足したので、過去の物の整理、片付けが多かったのである。兄二人は、自ら重労働を買って出た。ソ連軍は、日本が残置した多くの物資を本国に運んでいた。主なものはセメント、小麦粉、撤去した鋼材などであった。母も「豆炭作り」に度々出た。北朝鮮の地では、無煙炭の粉末を炭団にして燃料として使っていた。このような生活の中で難題が起きた。食料品不足もさることながら、衣料と履物の損耗が甚だしかったのである。最低一通りは、帰国するときには備えて確保しておかなければならない。生活費を得るために使役に出るにしても、着る物と履く物は不可欠だ。以前から地元に住居している邦人の

方からは親切な頂き物もあったが、それだけではどうにもならなかった。青い服に赤い布の継ぎ接ぎがあつても気にしてはいられなかった。それより深刻なのは、履物だった。ついに、兄たちはわらじを作る技術のある人を見つけて、わらじを作ってもらい、わらじ履きで使役に出かけるようになった。母は、近郊の朝鮮人農家から藁をもらつてきた。わらじは、すぐすり切れた。

そのような最低限の生活の中で唯一の希望は帰国であつたが、引揚げのうわさはまことしやかに伝わつてきては空しく消える、の繰り返しだった。

#### 十 ロシア語

ソ連軍の使役に出ると、否応なしにロシア語を聞くことになる。例えば「さようなら」「早く早く」「明日また来い」「今日は終わり」「時刻」など、大抵は使役監督者としての言葉だ。こちらも、少年期であるからすぐに覚えた。発音についても、注意すれば十分通じた。

あるとき、女性兵士が両手に大きな荷物を抱え

ていたので、ドアを開けてやった。彼女が「ありがとう」と言ったので、すかさず「どういたしまして」と言つてやったら、日本人の少年がそのままロシア語が話せることに驚き、荷物を置いてにっこりと笑つたことは、忘れられない思い出である。

#### 十一 三十八度線を越境する

空腹と不安の毎日は、ついに十三カ月に及んだ。昭和二十一年八月の終わりが、全居留民、避難民を何組かに分けての帰還計画が伝えられた。一年ぶりに再開された避難行であつたが、その日暮らしてあつた我が家には、準備するほどの何物もなかった。

まずは、鎮南浦港の埠頭に集結した。そこで厳重な荷物検査があり、大分緊張した。次兄が大事に持っていた小型英和辞典を携行することを許可した検査官は、「しつかり勉強して日本再建に尽くすように」と言つた。鎮南浦港は大同江河口に開けた港である。避難民が乗つたはしけは、機帆

船によつて曳かれて大同江をさかのぼり、内陸部へと向かった。はしけから上がった後は、自分の足だけが頼りの徒歩行軍となった。

コースなど知らされていなかったたので、落伍しないよう先導者について行くのみである。北朝鮮の九月の夜は寒く、野宿はつらかった。

はしけから上陸したのがどの辺りか、山地の間道をどう歩いたのか、今地図上でたどろうとして見たが、見当も付かなかつた。

三十八度線は夜中に越えた。越境地点は山の中で、私たちは声一つ立てず、ひたすら小走りに歩き続けた。そのときの緊張は清津脱出のときと変わらず、まさに「虎口を逃れる」思いであつた。

夜が明けたころ開城に着いて安どした。早速米軍から缶詰食が支給されたが、そのおいしさは忘れることができない。それは単なる「肉じゃが」に過ぎなかつたが、金色に光る空き缶は大きく立派だったので、とうとう家まで持ち帰り、井戸のつるべとして随分長い間使われた。

## 十二 仁川へ

開城からは、歩かなくても良かった。アメリカ軍のトラックに乗せられ、猛スピードで南下した。深い谷間をゆっくり流れる臨津江を筏で渡り、京城（ソウル）に入ったときは夜になっていた。かつて清津小学校では、六年生になると京城への修学旅行が行われていた。兄二人はその修学旅行を終えており、次は私の番と楽しみにしていた京城を、このような形で見るようになるうとは夢想さえしていなかつた。戦後一年余りを経ているので、町は明るく輝き、大勢の市民が夜を楽しんでいた。しかし、初めて見る京城の街もたちまち後に去り、仁川の軍用テントが並んだ収容所に入った。ここで初めてDDTの洗礼を受けることとなるが、これが虱（じしゅ）駆除の消毒とは思ひもよらなかつた。この収容所での待機日数は定かではないが、極端に窮屈であつたのが印象に強い。上向きに寝ることができずに、隣の者同士体をくっつけ合つて寝たことを覚えている。

收容所の金網の外には、銃を肩にした白ヘルメットのアメリカ兵が巡回していたが、中からの逃亡者よりも、外からの侵入者を警戒していたのではないかと思う。しかし、その監視をどう潜り抜けるのか、收容者から品物を買ったり、握り飯を売ったりする者が入り込んでいた。我が家には売る物も買う金もなく、ここでもまた空腹の毎日であった。

### 十三 乗船、故国へ

仁川の收容所には、十日余りいたように思う。仁川港も鎮南浦と同様に黄海に面し、漢江河口に開けた港で、潮の干満の差が大きいことで有名である。この上流に京城がある。

引揚船への乗船は夜であった。埠頭から米軍の舟艇に乗り、本船に送られた。舟艇は上陸戦用のものらしく、船縁が高くて夜空しか見えない上に、高いエンジン音と激しい波浪が一層不安な気持ちをおおひ、落ち着かないひとときであった。

引揚船は戦時標準型貨物船（戦標船）と言われ

る米山丸（六千トン）であった。船標船は、大戦中の船舶不足を補うためにいわば粗製濫造された船で、図体は大きいが速力はたった六ノットしか出なかった。この船については後日、「舞鶴引揚記念館」でガラスケースに納まった模型と再会することとなる。

大きな船倉は暗くかつ満員状態で、またもや空腹に耐えなければならなかったが、下船のときは「父祖の地、日本」という気持ちがあったので、その雰囲気には明るいものがあった。

速力の遅い米山丸は、船首にさざ波ほどの波を立てながら南下して行く。朝鮮半島の西海岸が、ゆるゆると移動していく幾日かであった。船はときどき長い汽笛を鳴らした。私たちも、それが水葬に弔意を表すものであることを、いつとはなく知った。

船内で、梯团长から初めて日本の情勢について話があった。天皇神格の否定、原爆投下、新憲法制定の動き、さらに連合軍総司令官が最高権力者

であることなど、想像を絶するようなことばかりであった。

船はついに佐世保に入港した。しかし、一向に上陸が始まる気配がない。受入準備が整っていないせいであろうとうわさされた。この時点で、帰国を知らせる手紙の差し出しが許された。それは、昭和二十一年十月中旬であった。

#### 十四 上陸、帰郷

いよいよ引揚船に別れを告げるときがきた。乗り移った小船は、佐世保湾から針尾水道を通って大村湾へと入って行った。初秋の天気の良い日で家々が間近に見え、木々は緑濃く、「これが待ちに待った故国か」と胸に迫るものがあつた

残念なことに上陸第一歩の地点が分からない。急造の兵舎跡らしい建物で一夜を過ごしたことを、引揚列車の乗車駅が大村線南風崎はえのさきであつたことを記憶している。上陸時に金銭、物品、衣服の給付があつたような記憶があるが、定かではない。

母は、故郷への帰着が間近になるにつれて、生

活の不安が募つてきた、と後々語つていた。今一つの不安は父の安否であつた。冒頭に、父は船員で留守仕勝ちと書いたが、実は昭和十八年三月内地航行中、船と共に全船員が海軍に徴用されて、「南方海域へ出発する」との情報があつた後は、音信不通になつていたのであつた。

引揚列車は、停車のたびに降りる引揚者と一般乗客とが入れ替わつた。車窓の風は快く、大きな停車駅では奉仕によるお茶の接待もあつた。代用食であつたが、給食もあつた。

山陽本線有年うね（赤穂市）には夜明けに着いた。結局、約二十四時間列車に乗つていたことになる。

#### 十五 父祖の地へ

急ぎ足で、いよいよ父母の実家へ向かう。最初に訪ねたのは、一緒に引き揚げて来た大伯父の実家だったが、ここで父の無事を知る。父は終戦をラバウルで迎えたが、終戦間近の八月三日、空襲により右目を失つていた。そのとき父四十五歳。

冒頭で「大伯父を頼つて父母が渡鮮した」と書

いたが、それは我が家だけではなかった。父の弟三家族、母の妹二家族がそれぞれかの地で生活していた。それらが家族を挙げて実家へ帰還するのであるから、母が帰国の途上で気をもんだのも当然と言えよう。父、母それぞれの実家も私たち一家を温かく迎えてくれたが、余裕のある生活というわけではなかったのだ。幸い父の実家が、昔営んでいた製材所の倉庫を提供してくれたので、当面の生活の場は得られた。早速、自活の道を立てなくてはならない。

#### 十六 開拓団入植

長兄は学業を終えていたが、次兄と私は中学退学のまま、弟妹は小学生の年齢であった。右目に戦傷を受けた父は手伝い仕事、母は衣料品の行商を始めた。長兄、次兄と私の三人は職が得られない田舎を出て、神戸方面に活路を求めた。神戸市内の中心部はバラックの商店が建っていたが、周辺は焼野原のままだった。就職の条件は、住み込み、賄い付きであれば何でも良かった。昭和二十

一年暮れから二十二年明けのころである。希望は容易には叶えられなかった。

私の場合、店員、工員、職人見習いなど転々としたが、いずれも定職を得るには至らず、結局父母の下へ戻ることになった。

昭和二十二年十一月、帰国後一年を過ごした父の実家での倉庫暮らしを終え、隣村の山間地に開拓入植することになった。戦災者、引揚者を対象とした国の対策事業である。電灯もない仮小屋住まいをして、開拓を続けた。芋が主食という貧しい食事しながら、木を切り笹を刈る毎日であった。その間現金収入を得たいと、悪戦苦闘を重ねた。果樹、養鶏、育雛、養豚、乳牛等々。しかし、この種の事業は従来からの専門業者がいて、小規模のにはわか仕込みでは徒労に終わるだけであった。

#### 十七 終章

時は過ぎ、私たち兄弟もそれぞれ正業を得て独立した。

父は、戦傷病者給付金が得られるようになり、

生活が安定した。昭和六十三年、八十八歳で病没したが、内海航路の小型船で赤道を越えたこと、補給が途絶えてからのラバウルでの自給自足の生活に耐えたことを語っていた。父の負傷も、海水による製塩作業中のことであつたことを知つた。

私たち一家が北朝鮮に渡る切つ掛けとなつた大伯父は、昭和二十四年、六十五歳で病没した。明治十七（一八八四）年生まれで、日露戦争に従軍し、朝鮮、満州に出征した。この経験が、明治末期に渡鮮する切つ掛けになつたのかもしれない。羽振りの良かった時代には村の社の建立にあつて多額の寄付をしたらしく、玉垣に大きく「朝鮮何某」とあり、子供のいなかつた大伯父の墓石代わりとなつている。

戦後六十年を振り返るとき、痛恨の思いは、ただ一人病弱のために避難行に加わることができなかった、大伯父の妻（当時五十八歳）のことである。その最後は知るすべもなく、今はただ冥福を祈るのみである。

## 十歳の記憶

—我が心の風景—

群馬県 伊藤好恵

太平洋戦争が終わつた昭和二十（一九四五）年八月、私は十歳を迎えたばかりでした。今では、歴史の一齣（まは）になろうとしているあの戦いの記憶は、人々の心から消えようとしています。昭和十六年十二月八日、日本からハワイの真珠湾への奇襲攻撃によつて、戦争の火ぶたは切られました。三年半余りの戦いは沖縄、広島、長崎などはもとより、多くの犠牲を出して、昭和二十年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾しました。あれから六十年、この歳月は人々の心を十分に癒したのでしょうか。今では時代の変化と共に、かつて日米間に戦いがあった事実をも知らない人が増えてきているようです。

思い起こせば、戦争が終わつて十年も経つたこ